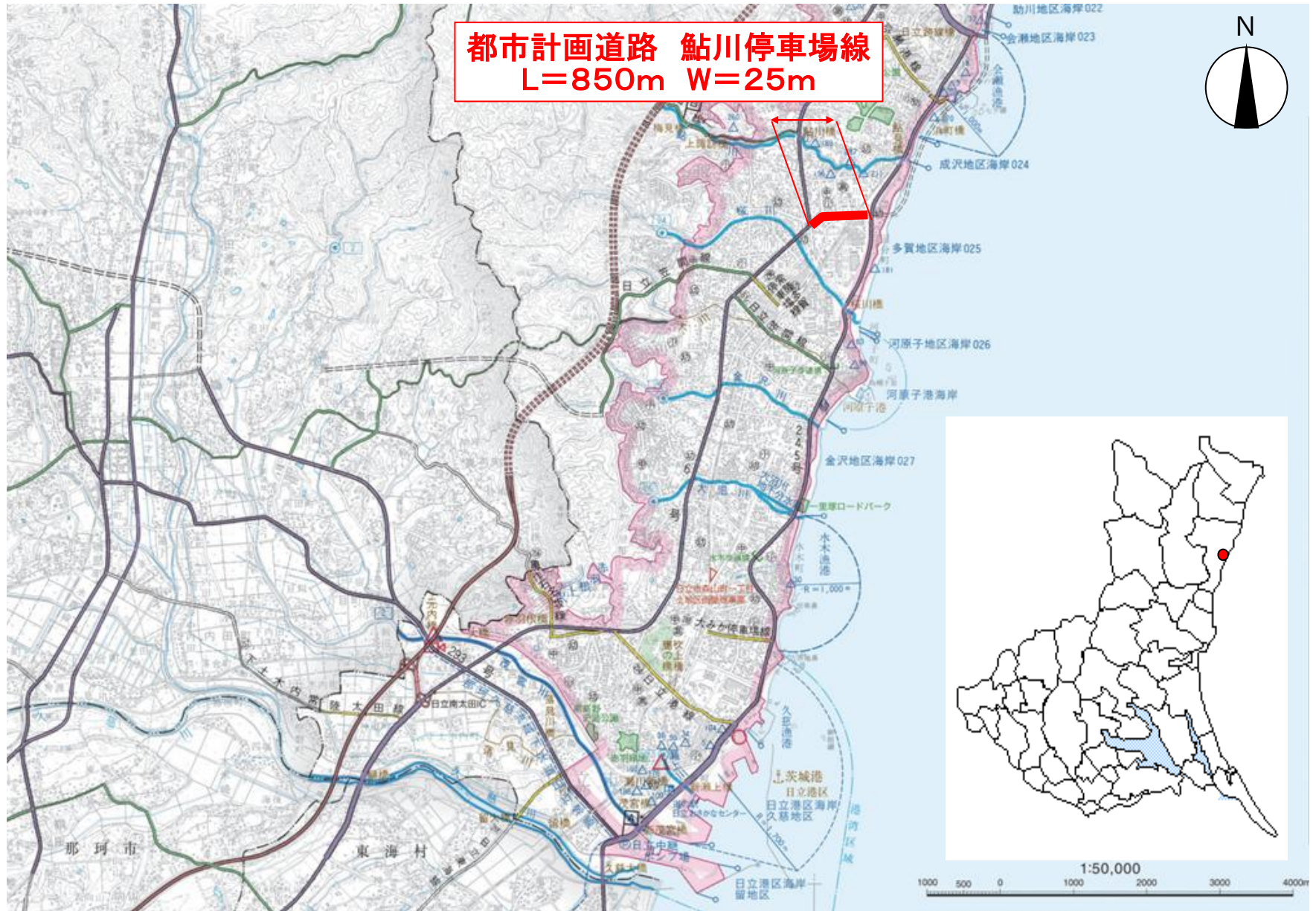


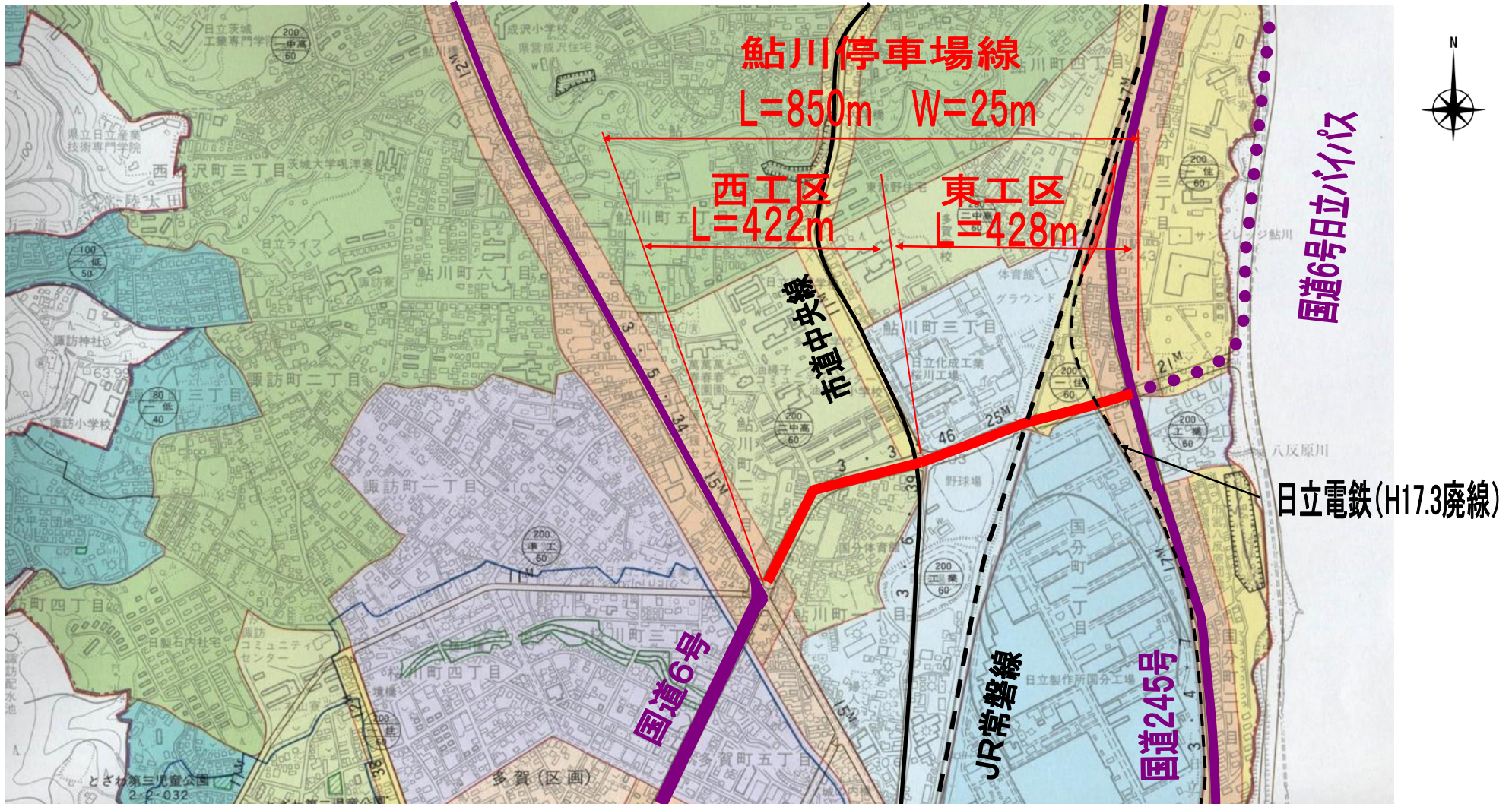
## 事業概要

応募No.	7		
事業主体	茨城県	事業箇所	茨城県日立市鮎川町～国分町地内
応募者名	茨城県高萩工事事務所		
ふりがな 事業名称	としけいかくどうろ あゆかわていしゃじょうせん せいびじぎょう 都市計画道路 鮎川停車場線 整備事業		
事業概要 (400字以内)	<p>本事業は、工業都市として発展してきた日立市の南北軸である国道6号と国道245号を東西に結ぶ幹線道路として計画され、平成14年度より鮎川町から国分町間の約0.85キロメートル区間において整備を進めてきた。</p> <p>これまで当地域は海と山にはさまれた市街地で、さらにJR常磐線により東西に分断されており、慢性的な渋滞や避難路の確保が課題であったため、鉄道の運行に支障を及ぼさない非開削工法(HEP&amp;JES工法)を採用し、JR常磐線とアンダーパス構造による立体交差を施工した。</p> <p>また、これにより通学路として利用されていた歩道のない狭小な踏切が除却され、歩道が整備されることで通学路の安全が確保された。</p> <p>令和5年5月に一部開通し、令和7年3月には全線4車線で開通、交通渋滞の緩和や緊急輸送道路網の強化を通じて地域の防災力向上に寄与した。</p>		
事業規模	事業延長(km)	約0.9km	
	幅員(m)	約25.0m	
	事業期間(和暦)	平成14年～令和7年	
	事業費(億円)	約99億円	
受賞歴	有・無	一般社団法人 全日本建設技術協会主催 全建賞(東日本枠)	
URL	事業に関するホームページを作成している場合はURLを記載。		

事業位置図



都市計画図(用途地域図)

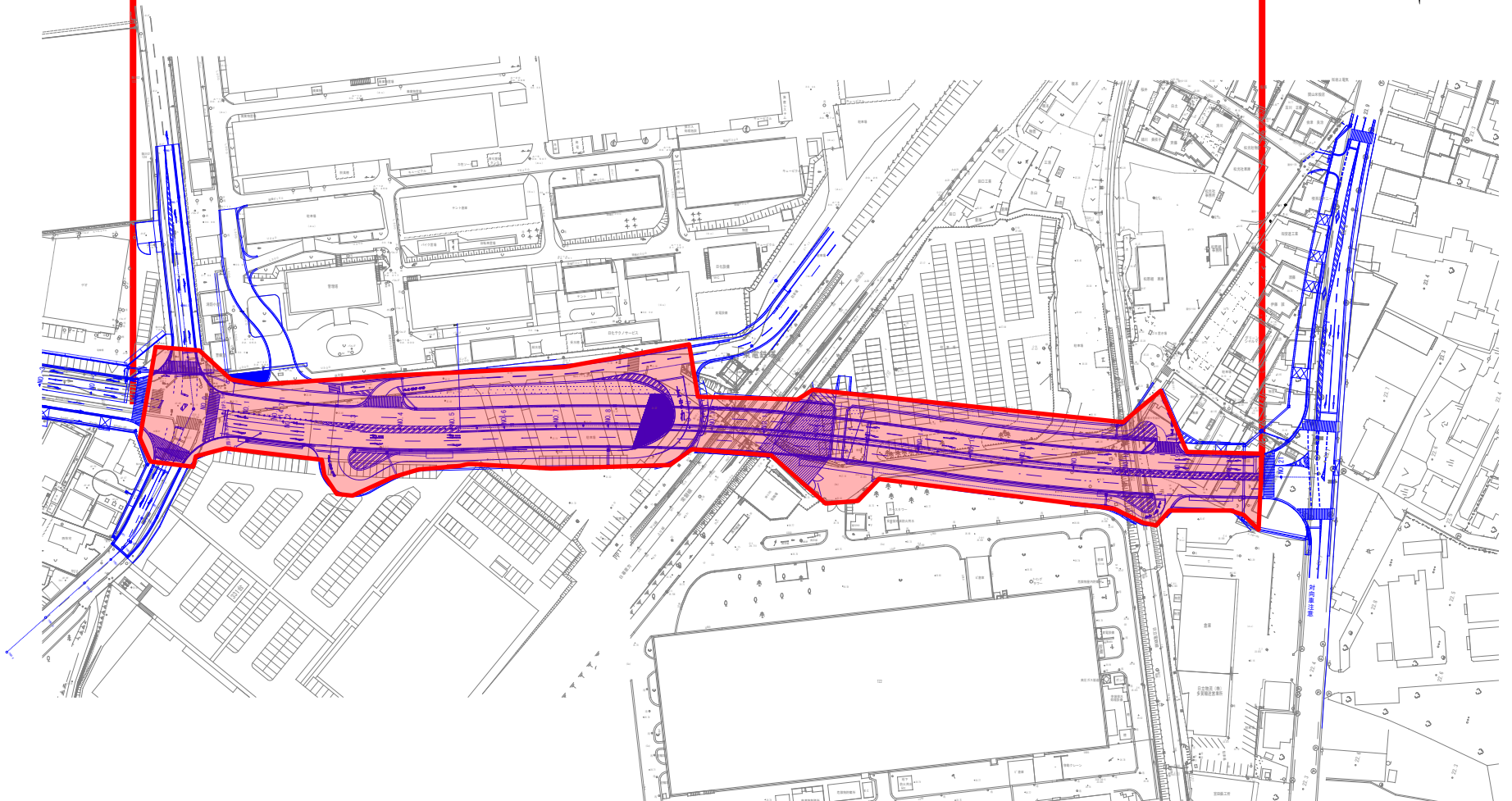


## 路線全体の進捗状況

今回応募区間

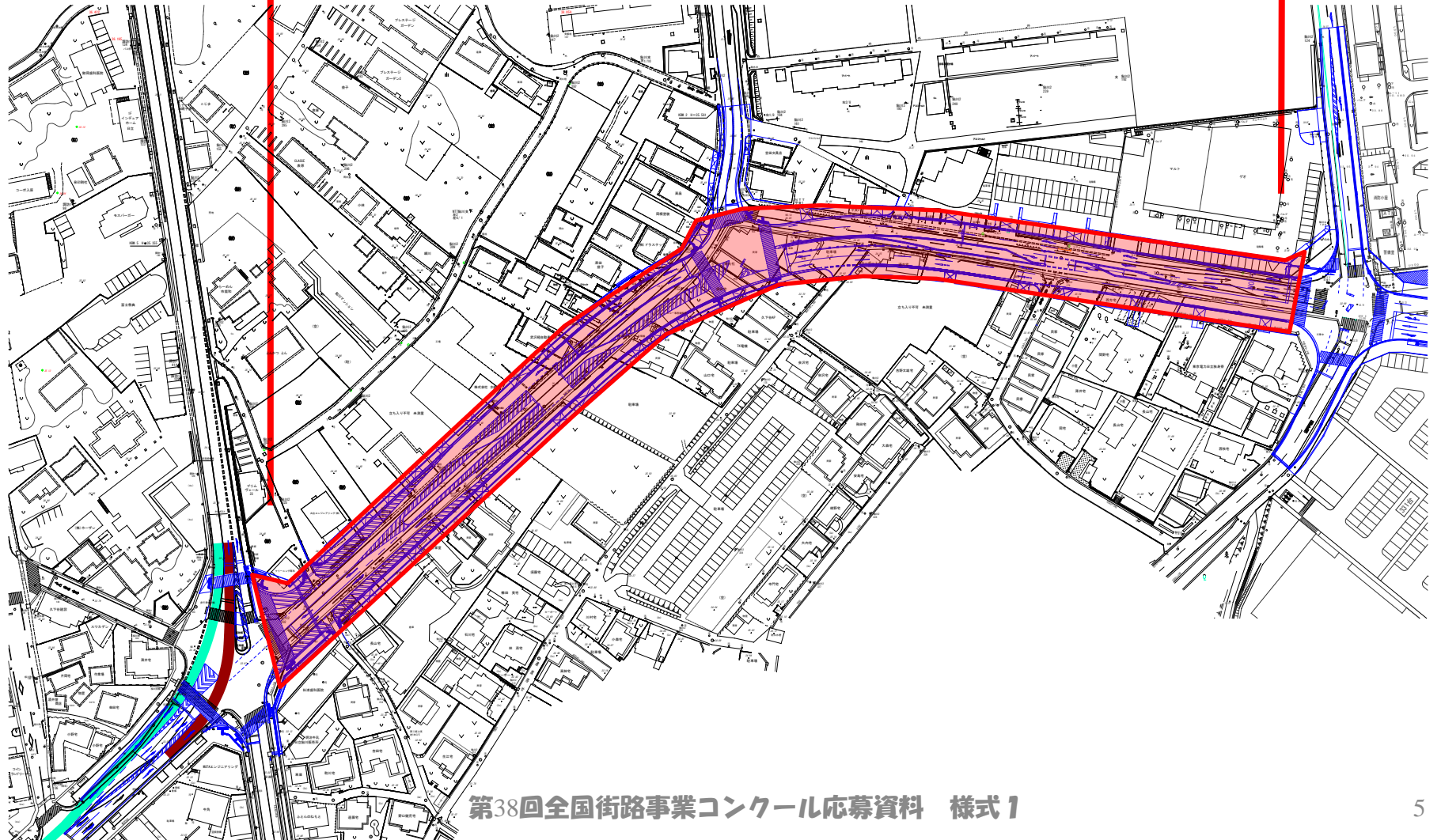
都市計画道路 鮎川停車場線（東工区）L=422m W=25/13m

令和7年3月27日全線開通

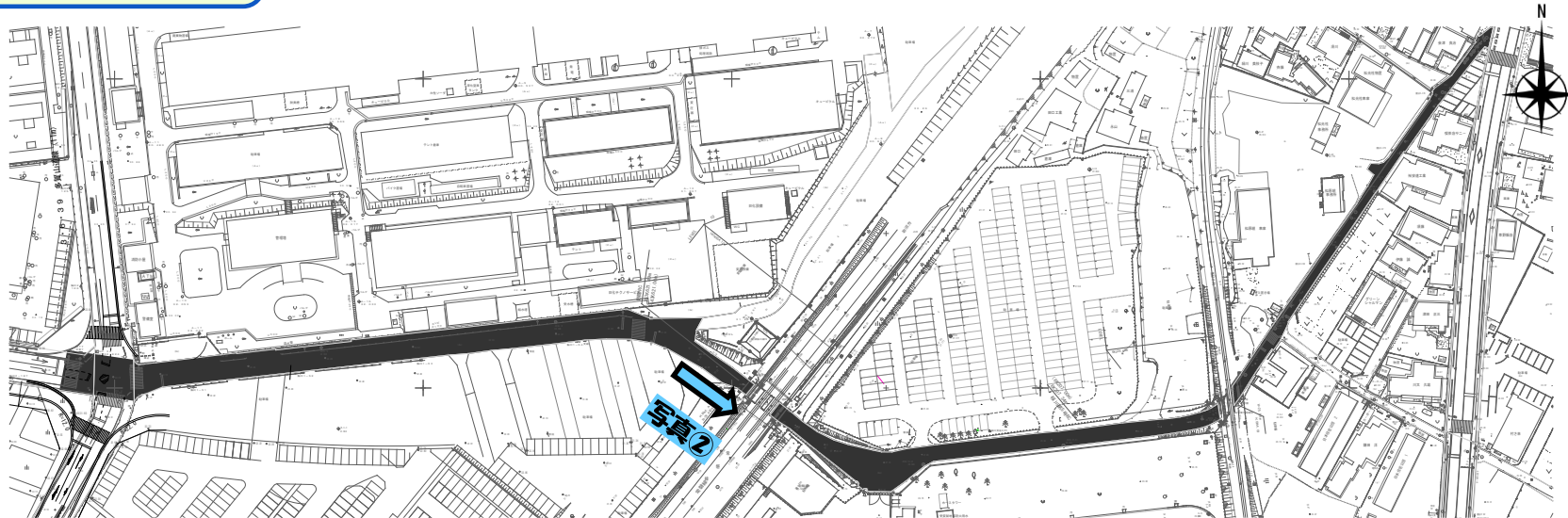


## 路線全体の進捗状況

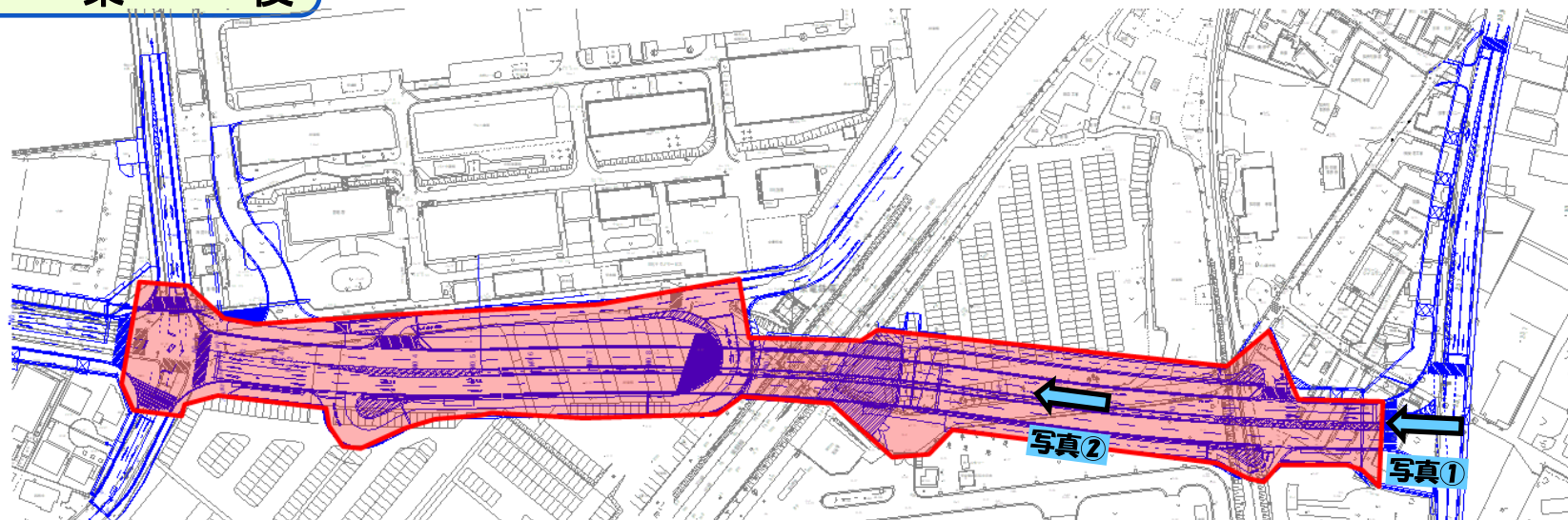
今回応募区間  
都市計画道路鮎川停車場線（西工区）L=428m W=25/13m  
令和7年3月27日全線開通



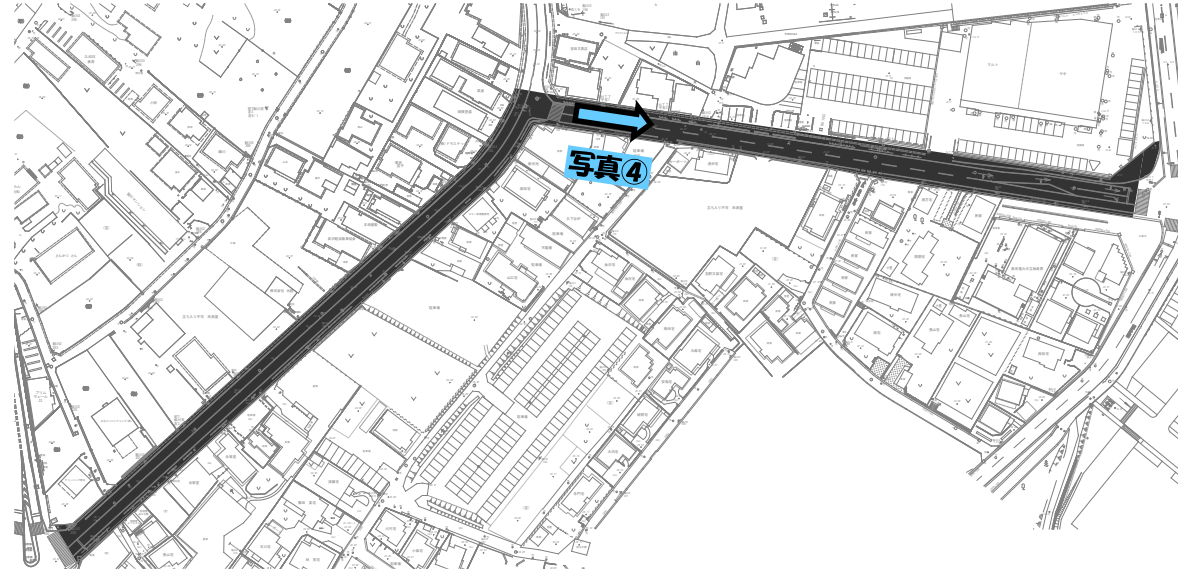
事業前



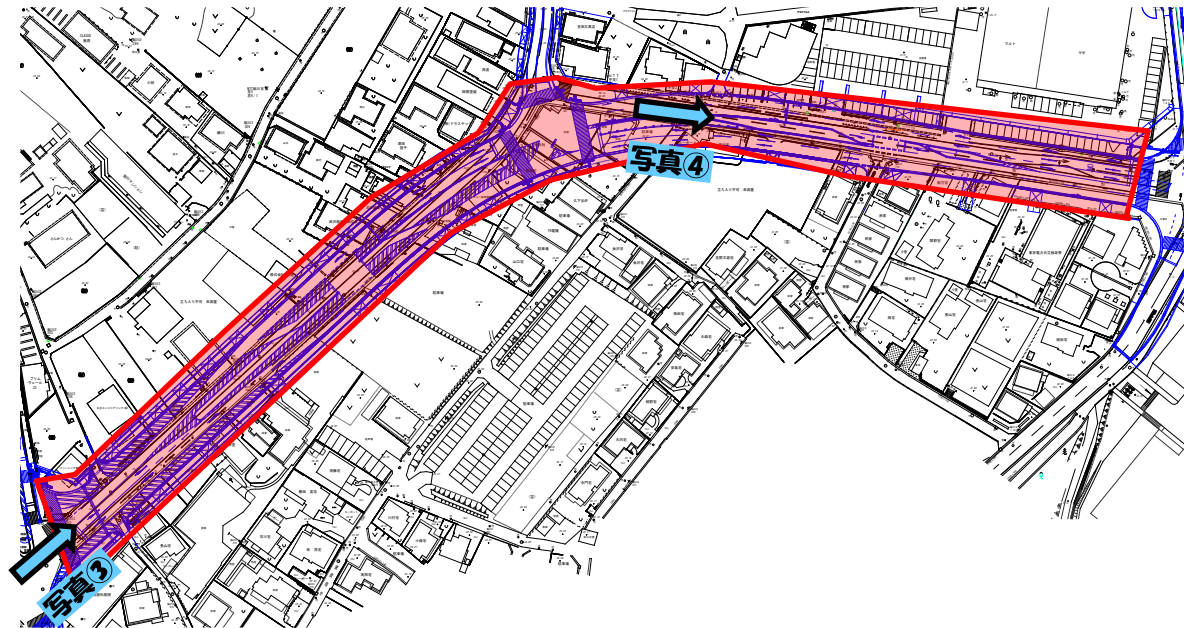
事業後



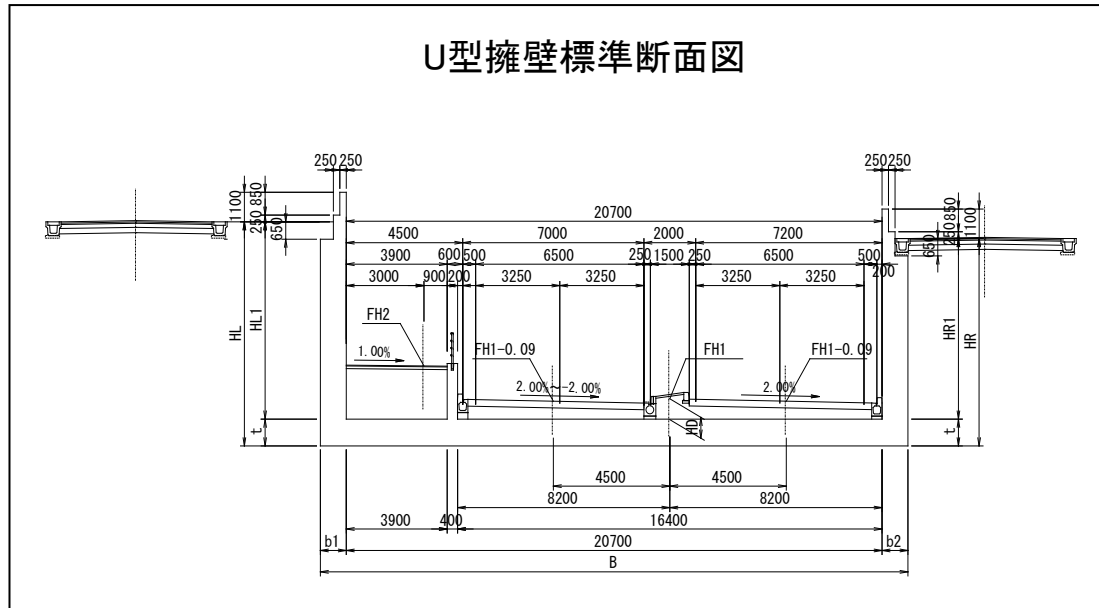
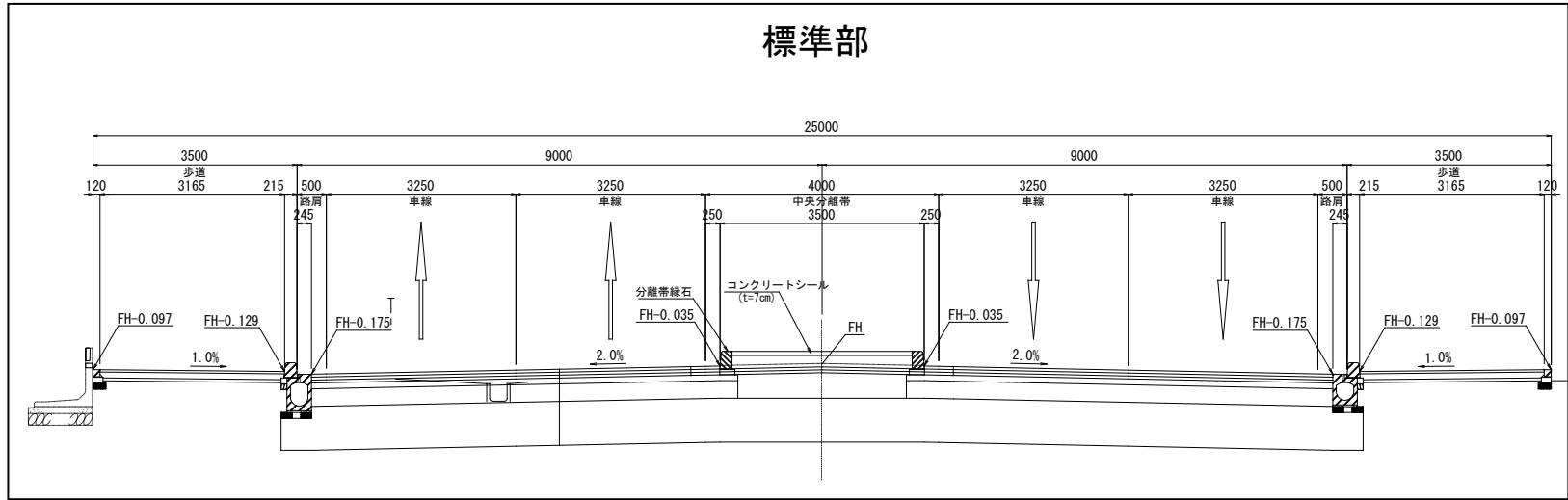
事業前



事業後



事業後



# 東工区事業前写真



2012年撮影  
写真②



2012年12月撮影

# 東工区事業後写真

茨城県：(都) 鮎川停車場線



出典：google maps

2025年2月撮影  
写真②



2025年2月撮影

# 西工区事業前写真

写真③



2012年撮影

写真④



2012年12月撮影

# 西工区事業後写真

写真③

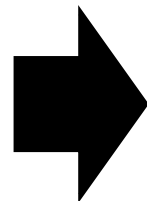


2025年2月撮影

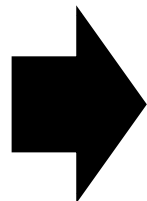
写真④



2025年5月撮影



**4車線化整備により、長年の課題であった日立市内の著しい交通渋滞の緩和**



**踏切を解消し歩道を新設したことによる歩行者の安全確保**

本事業は、JR常磐線とアンダーパスによる立体交差構造となるため、その施工においては、**日常的な鉄道の運行に支障をきたすことなく、かつ、列車、軌道面に対する影響を最小限にする工法が必要とされた。**

今回は横断構造物の断面が大きく、延長が長いことから、鉄道への影響を最小限に抑制することができ、**施工期間も短く、施工費用も抑えることができる、非開削工法のHEP&JES工法**を採用し、工事を完了させた。



アンダーパス構造は、適切に雨水が排水できないと冠水してしまい、また近年の豪雨の状況も踏まえると、排水方式は慎重な検討が必要とされた。

「圧送流下方式」、「自然流下方式」2つの方式を比較検討した結果、「圧送流下方式」は本線の近傍に圧送機械室設置のための用地の取得が必要となること、機械・電気設備の年3回の定期点検や機器の部品交換が必要になることなどから、**維持管理や経済性に優れる「自然流下方式」を採用することとし、道路本線の排水路起点管底高より流出先の河床高が低い近隣河川へ自然流下**するよう、排水路を整備した。



	自然流下方式	圧送流下方式
	 <p>上流マンホール 下流マンホール 汚水の流れ 下流になるほど深くなる</p>	 <p>流入管 ポンプ ポンプ機 排水</p>
用地	○	△
	旧電鉄跡地及び道路敷地への路線計画が可能であり、全て官地で路線を計画できる。	鮎川停車場線の近傍に機械室設置のための用地が別途必要となる。
維持管理	○	△
	自然流下方式であるため、基本的には年に1回程度の点検・調査のみとなる。	機械設備、電気設備となることから年に3～回の定期点検に加え、機器の損耗具合による部品交換が適宜必要となる。稼働頻度が少ない場合には試運転調整も必要となる。
経済性	○	△

図-1 排水方式比較検討

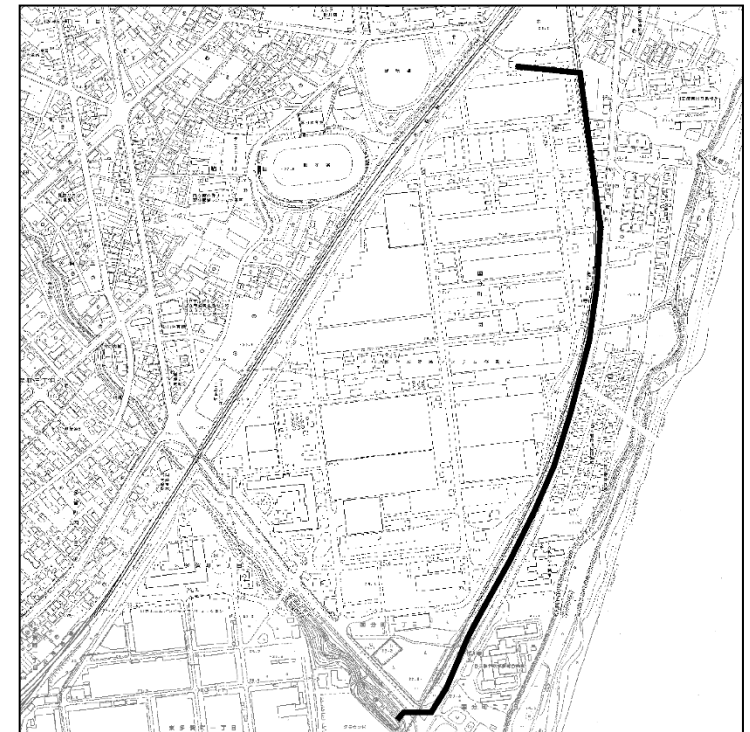


図-2 排水路整備図面(自然流下)

**一般社団法人 全日本建設技術協会**  
**全建賞（東日本枠）受賞**